

第6章 検討委員会の開催

森林・山村多面的機能発揮対策の取組状況等について、専門的な見地から検討を行い、今後の展開等についての論点の整理や提言を行うことを目的に、有識者 4 名で構成する「森林・山村多面的機能発揮対策評価検証事業 検討委員会」を設置し、3 回の委員会を開催した。検討委員会の委員構成及び各回の開催概要を以下に示す。

6-1 検討委員会の開催経過

■検討委員会の設置・開催

平成 28 年度は有識者 4 名で構成する検討委員会を 3 回開催した。

森林・山村多面的機能発揮対策評価検証事業 検討委員会 委員一覧

氏名（敬称略）	所属・役職	備考
山本 信次	岩手大学農学部 准教授	委員長
関 仁	阿賀町役場 農林商工課 課長	委員
丹羽 健司	特定非営利活動法人地域再生機構 木の駅アドバイザー	
森本 淳子	北海道大学 農学研究院 准教授	

〔事務局〕 林野庁 森林整備部 森林利用課

検討委員会の開催状況

回数	開催日時	会場	主な検討議題
第1回	平成 28 年 10 月 12 日(水) 14:00－16:00	日本橋プラザ 第 2 会議室	①事業概要 ②地域協議会及び活動組織へのアンケート調査について ③森林の多面的機能の向上状況の確認方策について ④活動事例集の対象候補について
第2回	平成 28 年 12 月 20 日(火) 13:30－15:30	東京国際フォーラム G503 会議室	①地域協議会及び活動組織へのアンケート調査結果（速報）報告 ②森林の多面的機能の向上状況の確認方策に関する目標について
第3回	平成 29 年 2 月 27 日(月) 13:30－15:30	東京国際フォーラム G501 会議室	①報告書概要について ②森林の多面的機能の向上状況の確認方策について

6-2 検討委員会での主な議論

(1) 第1回検討委員会（平成28年10月12日）での意見等

検討議題	主な意見等
開会挨拶	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行政事業レビュー公開プロセスにおいて、総合的な判断としては「事業全体の抜本的な改善」又は「廃止」と、非常に厳しい結果であった。 ・ 来年度は、成果目標について、これまで活動組織の主観的な評価をアンケートで把握していたものを見直し、森林の多面的機能の発揮に関する数値目標を設定していくということ形で、抜本的な改善を行うということで予算要求をしている。 ・ 森林の多面的機能の発揮に関する数値目標については、国が目標設定のガイドラインを作成し、そのガイドラインに沿って活動組織が目標を設定するとともに、達成の状況をモニタリングする仕組みを構築するということを考えている。
アンケートの内容について	<ul style="list-style-type: none"> ・ アンケートは質問数が多いので、短くした方がよい。
森林の多面的機能の向上状況の確認方策について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 林内照度や相対樹幹距離のように、完璧には測れないまでも森林の機能が向上したことを示すことができるような指標をどう作るのが課題であると考えられる。 ・ 前後評価を一年単位でしろと求める方がおかしい。森林との付き合いはもっと長いスパンで見ていくべきものではないか。 ・ 1年で変わるものと、長期にわたって調べるものと、2側面を出すのはどうか。活動の前に最低ラインとして、簡略版にして調べるべきものをチェックしてもらうことを一番の基本として、それにプラスアルファでここだけはやる前とやる後で変わった部分を記入できるものを作っておけばよいのではないか。 ・ 森林の評価については、評価によって森林を知ることには一番の大きな目標があるのではないか。 ・ 生物多様性については、種が多ければ多いほうが良いかのような指標はやめた方がよい。 ・ 森林の多面的機能だけだと、目標林形がわからない ・ 林産物については文化的な利用も行われている。市場で価格に置き換えられるものだけでなく、どれだけ増えるなどの指標が簡単で解りやすいのではないか。

(2) 第 2 回検討委員会（平成 28 年 12 月 20 日）での意見等

検討議題	主な意見等
アンケート結果速報について	<ul style="list-style-type: none"> ・ アンケートの結果について、交付金を得て活動したにもかかわらず、状況が悪化したケースが見られる。交付金を受け取ったがゆえに悪くなったというのではなくて、交付金を受けて活動してもなおかつ対応しきれなかったところがあるという理解でよいのか。 ・ 活動したにもかかわらず起きてしまったことと、活動を行ったがために起きたことはだいぶ異なるので、書きぶりに注意をする必要がある。 ・ 全体的に言えるのは、横の情報交換が非常に大事である。コミュニティ的な動きの所についても会議をやる回数を重ねているところはよい感じで動いているということが何となく見えている。
森林の多面的機能の向上状況の確認方策に関する目標について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現状調査を行うことについて重要であるのは学びの場であるということである。 ・ 最低ラインの森林の現況調査と、作業したことで何が変わったかを出してもらえれば数字は出しうるのではないかと ・ 調べることは 1 つか 2 つにして、そのことがどういう意味を持っているのかっていうふうに解釈させないと、シンプルにすることは不可能だと思う。 ・ 目標の設定と現状把握と、目標に対して適切な方法が取られているかということで評価すればよいのではないかと。そこが最終的に、あまり林業とか森林とか詳しくない方に対して説得力のある数字かどうかが一番の問題となる ・ 里山は、みんな作法が違う。それぞれの作法の中で、それぞれの目標を数値化する。作法そのものの是非を問うと、まとめることができない。 ・ コミュニティ的なものと NPO 的なものでどうしても差が出てしまう。NPO みたいなものは最初から良い森を作ろうというような意識があるので、そうすると、学んでいこうみたいなふうに行きやすい。 ・ 現況調査と事後の調査。それはできるだけシンプルなことにして、そのシンプルな調査結果が意味することを僕らの方が後付けしていくっていう方がよいと思う。

(3) 第 3 回検討委員会（平成 29 年 2 月 27 日）での意見等

検討議題	主な意見等
報告書概要について	<ul style="list-style-type: none"> ・ ベテランの人ほど安全装備をつけないことについての歪んだ美学というのが現場作業の世界にはある。今まで防具を使ってこなかったことなどで、防具の重要性についての認識が誤っているとか。そういうことを書いたほうが良い ・ 基本は、誰であろうと守りあうためのルールを作り、そういうことを伝えあえる関係性のある仲間づくりをしていくことである。安全対策については、強め強めに強く書くべき
森林の多面的機能の向上状況の確認方策について	<ul style="list-style-type: none"> ・ 相対樹幹距比の話は、やる前とやった後に二回同じことをやって、何%減ったかが分かれば良いだけのことだと思う。 ・ 材積率にして 30%以上ぐらいの間伐を一度に行うと、積雪地では雪害が多くなるというのは経験的に分かっている。 ・ 大事なものはきっと「調べたこと」である。調べたことを数値化してどうすべきかをみんなで議論したことが大事。 ・ 現場で調査をして、活動組織が成長することが必要だと思う。 ・ 森林資源利用タイプに関しては、むしろその森の調査と言うよりは使った資源量が分かれば良い。 ・ 単年度で作業実行前の状態と、作業後の改善を調べ、その改善というのは、どのような意味を持つのかを、委員会なり何なり専門家の側がつけ、解釈してあげることなのではないか。 ・ 希少な植物については、無い場合も対象にしなければ、やる気が起こらないのではないか。 ・ 本当は外からの評価に対応しての、数値を出すための調査という面と、団体が成長するための手法としての調査という側面の両方ある。 ・ 数値データを示さなければならないという話は、同じ調査を前後でやって、変化を数値として示せばよい。現場にもそれ以上のことを求めても、おそらく出来ない。全体からいうと 2/3 が調査していない所から求められるのは限界がある。 ・ 今回は最初のステップであり、特に数値データとして外部評価に耐えるものをやるには全員ができなければならない。 ・ ビッグデータが取れる統一的な、しかも出来るだけ簡易な調査という物と、あるいは個別の色々な工夫を集められるような二段構えみたいなものが出来れば良い。